



日一日と、春に近づいてきました。

甲南大学人間科学研究所が5カ年計画で

おこなってきた研究事業もゴールが見えてきました。

今年度は、「心理療法と超越性」「性的差異の社会的未来」の
2つのテーマで研究を進めてきました。ニュースレター第14号
では、その集大成である論文集の内容をご紹介します。

そして4月からは新しいテーマでの研究活動がスタートします。
今後の活動にもぜひご注目ください。





現代の日本社会は、政治も経済も混迷を極めています。労働者の実質賃金が毎年低下し、正規労働者は切り捨てられる一方で、派遣社員やパート職員が増加の一途を辿るという構造的矛盾を深めています。こういった状況のなかで、こころの病が増え続けていることは当然と言え、驚くような犯罪の増加や自殺者数の急増とこころの病が関連していると推測するのも無理からぬことでしょう。

また昨今は、スピリチュアルブームと言われ、スピリチュアル・カウンセラーなる存在がもてはやされています。個人の力を超えた存在である霊や占いに、断定的に自分の運命を当ててもらったり、予言してもらったりすることがマスメディアでも大きく取りあげられ、ある種のサブカルチャーを形成しています。世の中の混乱期や過渡期に、怪しげな霊性や宗教性が蠢き始めることはこれまでの歴史が示しています。

このようななか、こころの病に立ち向かう医療や心理療法の状況を見てみると、その中心を担うべき精神医学では、こころの病を全人的に把握しようとする精神病理学が衰退の一途を辿り、診断はマニュアル化され、脳科学、神経心理学や薬物療法などのいわゆるEBM (Evidence-Based Medicine : 実証的証拠に基づいた医療) の力が大きくなっています。心理療法においても、深層心理に重点を置く精神分析的な心理療法の諸派やユング心理学に基礎を置く心理療法などは実証的証拠を欠くとして、認知行動療法が力を増しつつあります。

死すべき運命にあり、有限の存在である人間にとって、病や死とどう向き合うかは、古代からとても重要な課題でした。そしてそれは近代に至るまでは、シャーマンや宗教、民間治療的なものに委ねられていたのです。近代において自然科学が優勢となると、それに伴って医学が発展しました。かつては魂の問題として宗教に委ねられていたこころの病は、自然科学的方法論によって医学の対象となり、精神医学が生まれました。そのあまりにも極端な脳局在論、生物学的精神医学に対して批判的に登場した人がフロイト (Freud,S.) です。そして彼は「無意識」を発見します。近代医学を出発点とする心理療法は、フロイトの業績に起源を持つと言っても過言ではありません。

フロイトは、自然科学的方法論から「治療者は中立でなければならない」という態度を取り続け、治療者とクライアントという二人の個人の関係のなかで治療を行います。一方ユング (Jung,C.G.) は、二者関係を越えた第三の力に着目します。例えばある印象的な夢イメージは、圧倒的な力を持って夢見手に迫って来ます。またある自然の偉大さは、言葉で表せない圧倒的な力で人々のこころを捕らえます。これらの、何かを超越した壮絶な力を、ユングは重視したのです。

スピリチュアル・カウンセリングや占いは霊的な力を借りて答えを即座に断言しますが、この意味では、心理療法と対極にあります。心理療法はクライアント自らが変容の道を見出していく世界です。その過程において、治療者とクライアントの二者関係を超越した力が働くことを経験することがあります。それは科学的に説明することは困難であるものの、確実に働いています。

近代に生まれた心理療法の世界では、これまで魂の問題や宗教性、何かを超越する力というどこか胡散臭さがつきまとう世界を避けてきたくらいがあります。それは、学問として科学的でなければならないという呪縛があるためでしょう。しかし、このような時代であるからこそ、超越性の問題を心理療法のなかでしっかり位置づけなくてはならないと考えます。

本書は、精神医学、臨床心理学の他、哲学、宗教学、神話学、民俗学というそれぞれの立場から、この課題について論じています。こうしたことを論ずることは、心理療法にとってはもちろん、21世紀初頭の混乱した状況において危急のことでありましょう。

甲南大学人間科学研究所叢書
＜心の危機と臨床の知＞10

心理療法と超越性 ——神話的時間と宗教性をめぐって

2008年2月人文書院より刊行



編者：横山 博 (甲南大学文学部／精神医学・ユング心理学)

差異としての超越	木村 敏
開けとしての変性意識状態	垂谷 茂弘
狂気と癒し	
——ディオニュソス神話とネルヴァルのばあい	篠田知和基
神話的時間と超越体験	鎌田 東二
心理療法と超越性の弁証法	河合 俊雄
こちら側とあちら側のとけあう場所へ	
——心理療法と大島弓子の超越性	明石 加代
魂と時間	
——無意識の無時間性をめぐって	名取 琢自
境界性人格障害タ子の心理療法過程における超越性	
——超越性が諦念か	横山 博

甲南大学人間科学研究所 第8回公開シンポジウム
心理療法と超越性——神話的時間と宗教性をめぐって
パネルディスカッション

暴力の発生と連鎖

2008年2月人文書院より刊行



編者：上村 くにこ（甲南大学文学部／神話論・ジェンダー論）

第一部 暴力の臨床

- 犯罪・非行臨床から見た「暴力」…………… 藤岡 淳子
男性がここに抱えるものをどう扱うか…………… 濱田 智崇
DV加害者への取り組み
——「メンズサポートルーム」に関わって…………… 千葉 征慶

第二部 暴力の構造論

- 優しいままの暴力…………… 森 達也
米国プロパガンダ・ポスターにみるナショナリズムとジェンダー
…………… 北原 恵
残虐性に彼方は？…………… 港区 隆

第三部 暴力の神話学

- 暴力神の系譜…………… 篠田知和基
ヘシオドスに現在（いま）を読む
——暴力・争い・正義・ジェンダー…………… 饗庭千代子
ギリシア悲劇における暴力と女性なるもの…………… 上村くにこ

今日ほど暴力が身近な問題となってわれわれに迫ってきたことはありません。新聞を広げると、紙面は暴力の記事で埋めつくされているといっても過言ではないでしょう。資本主義と共産主義との対立構造が終焉したとき、われわれはつかのま戦争の終焉を夢見ましたが、それは結局やってきませんでした。戦争の脅威はやむどころか、コンボ、北朝鮮、パレスチナ、中近東、アフリカで、資本主義の一枚岩の裂け目から、戦争の火が燃え続けています。日本の政治家たちの間では、60年続いた平和憲法を改定し、戦争へのフリーパスを手に入れようとする動きが活発です。

また今日の暴力は日常生活のあらゆる側面に忍び込んできています。まずは家庭。DVの数は増す一方であり、児童虐待、高齢者虐待、家庭内暴力もあとを絶ちません。また親が子を殺し、孫が祖母を殺すといった、親族が親族を殺す事件は、ニュースにもならないほど頻繁に起こっています。そもそも家庭は、パワー・ポリティクスが、影に日向に強くはたらし、目に見えぬ暴力の温床となっていた場でしたが、それが今日、痛ましい形であらわになっているのです。街に出れば、無差別殺傷事件や、弱者のなぶり殺し、子供の誘拐、殺害などのニュースが毎日のように飛び込んできます。また今日の早急な問題として、学校におけるいじめや暴力事件は、子供たちの心はもちろん、教師や親の心に重くのしかかっています。職場ではセクシュアル・ハラスメントやパワー・ハラスメントという言葉が重くのしかかり、目に見えない暴力についての意識が高まっています。

ひとつの暴力が発生すると、それは水面に投げられた石の波紋のように広がり、その影響力は目に見えなくなっても、さまざまな形で長いあいだ力をふるい続けます。暴力が別の暴力を産み、その傷と痛みは幾世代にもつなげて、その連鎖が歴史をつくってきたといえるでしょう。

考えてみれば「暴力」という日本語は実に意味があいまいなのです。広辞苑をひいてみると、「乱暴力・無法な力」としか書かれていません。実はこの言葉は、「社会」や「哲学」と同じように明治時代の造語でした。かといって外国語がこの暗くて熱いエネルギーをうまく表現しているかというところでもないのです。ドイツ語の Gewalt にはもともと「正当な権力」という意味あいが含まれていますが、英語やフランス語の violence は、ラテン語の「猛烈な力」という意味の vis を語源とし、「主体の統御がきかないような猛烈な力」という意味から出発しています。暴力は「支配し統制するための権力」と、「統御不可能な力の噴出」という矛盾したふたつの意味をはらんでいるのです。この矛盾こそ暴力の特徴といえるでしょう。

本書は、暴力が発生する源はどこなのか、それはどのようなメカニズムで連鎖してゆくものなのかを、臨床心理学、表象研究、精神分析学、哲学、神話学という異なった立場から問うものです。なによりも暴力を人間の心の問題としてとらえ、暴力をふるうもの、ふるわれるものの実態を見据え、その心理的構造はどのようなものなのか、また暴力はどのように表象や神話で表現され、説明されているのかを考察します。

第一部「暴力の臨床」では、暴力をふるう者の側に寄り添う臨床の現場から、手探りで創造的な実践の報告を集めました。臨床心理学は、クライアントがどのように暴力と向き合っていくのかを観察してきました。加害と被害の双方のメカニズムを把握することが、今日ほど重要になったことはありません。第二部は、「暴力の構造論」と題して、宗教、ジェンダー・イメージ、そして精神分析学などの切り口で、暴力が社会的状況のなかでどのような働きをするかを扱います。第三部「暴力の神話学」では、神話が暴力をどう説明してきたかを研究します。神話とは神（々）の暴力がいかにして宇宙の覇権を握ったかという「暴力の物語」といえるでしょう。そこには暴力と権力が分かちがたく絡みあっているのです。

現代社会は暴力を絶えず生み出しながら、それに「悪」のレッテルを貼り付けることによってその本質を隠蔽し、暴力を語ることも、悲しむことも退けるようなシステムを作り上げてきました。暴力からくる苦痛を、しっかりと受け止め、表現することができない社会こそ、暴力を増殖する温床となるのではないのでしょうか。暴力と向き合い、冷静にそれを観察することによって得られるものは絶望ではなく、ほのかな希望と勇気なのです。

2003年度～2007年度の活動

文部科学省学術フロンティア推進事業・第2期

「現代人の心の危機の総合的研究——近代化のひずみの見極めと、未来を拓く実践に向けて」

公開シンポジウム

第5回 ト라우マ概念の再吟味——埋葬と亡霊

シンポジスト: 加藤 寛・白川 美也子・高橋 哲哉・森 茂起

指定討論者: 中井 久夫・港道 隆

第6回 花の命・人の命

——震災10周年を記念して生命(いのち)を考える

シンポジスト: 田中 修・岩城 見一・高阪 薫・浅野 房世・川戸 圓

指定討論者: 加藤 清・斧谷 彌守一

第7回 育てることの困難——家族・教育・仕事の今を考える

シンポジスト: 中里 英樹・高石 恭子・汐見 稔幸・斎藤 環

指定討論者: 北原 恵・横山 博

第8回 心理療法と超越性——神話的時間と宗教性をめぐって

シンポジスト: 河合 俊雄・木村 敏・上村 くにこ・鎌田 東二

指定討論者: 垂谷 茂弘・横山 博

研究会

第1回 タビストックにおけるトラウマへのアプローチの実践

第2回 フランス・フェミニズムの30年

——E・バダンテールの新著(2003.4)を巡って

第3回 児童養護施設における心理治療事例と解離について

第4回 「外国人」の精神医療と市民権

第5回 癒しを巡る宗教と心理

第6回 ジェノサイド・メンタリティとトラウマ

——批評理論からのアプローチ

第7回 震災とところのケア——8年間の実績と今後の展開

第8回 「狼男 Wolf Man」をめぐる人々

第9回 歴史のなかのトラウマと解離

第10回 「靖国」と「歴史」のトラウマ

第11回 虐待によるトラウマと世代間連鎖

第12回 解離と外傷——精神分析的理解と治療

第13回 グローバリゼーション、ナショナリズム、「心のノート」

第14回 秘すれば花なり——世阿弥の能楽論

第15回 花の感性・感性の花

第16回 グローバリゼーションの生—政治学——例外状況の諸相

第17回 現代詩を手掛かりにして見る9・11以降のアメリカ社会

第18回 ばらの花束——子供のアートはどのように開花するか
(力動的アート論のために)

第19回 植木鉢の花——アウトサイダー・アートが生まれる土壌

第20回 沖縄・島唄に花を読む

第21回 「曼荼羅」としての花

——花のイメージの多様性とその変容のプロセス

第22回 母子臨床の実践と研究から見た子育て環境の変遷

——変わるもの、変わらないもの

第23回 グローバリズムとアメリカの精神分析

第24回 共同体/感性/無意識

——戦後日本の意識変容への批判的パースペクティブ

第25回 御伽草子と説教に見る母子関係の諸相

第26回 いま——戦後効率主義の帰結

第27回 子育ての困難と働き方

第28回 青少年における非社会性の「病理」

第29回 ニート・ひきこもり支援とカテゴリー化

第30回 都市社会とコミュニティ・サポート

第31回 男の子育て——中間世界の喪失と男の生き方を中心に

第32回 ブランディング戦略とデザイン

第33回 暴力・ジェンダー・アート——性的な傷つきと表象

第34回 開けとしての変性意識状態

第35回 心理療法における超越——超越の不可能性と現実

第36回 語り始めた男たち——ホットライン・グループワーク

第37回 宗教における超越と内在——シャーマニズムにおける

心身の変容・変身・変態の問題をめぐって

第38回 ギリシアが現在を語りだす

——暴力の起源・暴力のジェンダー

第39回 境界性人格障害の心理療法過程にみられる超越性

第40回 ユング心理学と超越性——「魂」と時間

第41回 超越としての自己性——統合失調症の臨床から

第42回 ギリシア悲劇にみる 死・狂気・女性なるもの

その他の企画

心理臨床ワークショップ(1)～(5)

園芸療法研修会(1)～(5)

〈グループワーク〉教師のための茶の湯による癒し

〈上映会&トーク〉『デリダ、異境から(D'ailleurs, Derrida)』

〈特別企画シンポジウム〉暴力の神話と女神

叢書〈心の危機と臨床の知〉

第5巻 『埋葬と亡霊——トラウマ概念の再吟味』 森 茂起 編

第6巻 『花の命・人の命——土と空が育む』 斧谷 彌守一 編

第7巻 『心と身体の世界化』 港道 隆 編

第8巻 『育てることの困難』 高石 恭子 編

第9巻 『「いま」を読む——消費至上主義の帰趨』 川田 都樹子 編

第10巻 『心理療法と超越性——神話的時間と宗教性をめぐって』
横山 博 編

第11巻 『暴力の発生と連鎖』 上村 くにこ 編

人文書院より刊行(各巻2500円+税)

2008年度からの研究計画

KIHS共同研究プロジェクトⅢ「心の危機の見極めと実践的ネットワークの創造」

これまでの研究事業(2期10年にわたって文部科学省学術フロンティア推進事業に採択)の成果を引き継ぎ、次の4つのテーマで研究を進めます。これまで同様、公開シンポジウムや研究会などを開催する予定です。現在、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(仮称)への申請を準備しています。

4つのテーマ

●加害と被害(企画: 森 茂起・港道 隆)

●育て-育てられる関係の危機(企画: 高石 恭子・穂刈 千恵)

●芸術と芸術療法(企画: 川田 都樹子・西 欣也)

●現場を生きる心理療法(企画: 穂刈 千恵・森 茂起・高石 恭子)

発行年月日: 2008年3月7日



編集後記

ゴールラインは次のスタートライン。季節が一巡りして、人間科学研究所も研究スタッフも、このラインに立っています。おかげさまで、この5年間の研究会や研修会、シンポジウム、出版などの研究活動を通して多くの成果を生み出すことができました。今春からスタートする新しい活動ではどんな出会いや発見があるのか・・・今から楽しみです。

(写真: 大阪市中央区糸屋町・中大江公園、文学部人間科学科・坂根由里子さんより提供)